

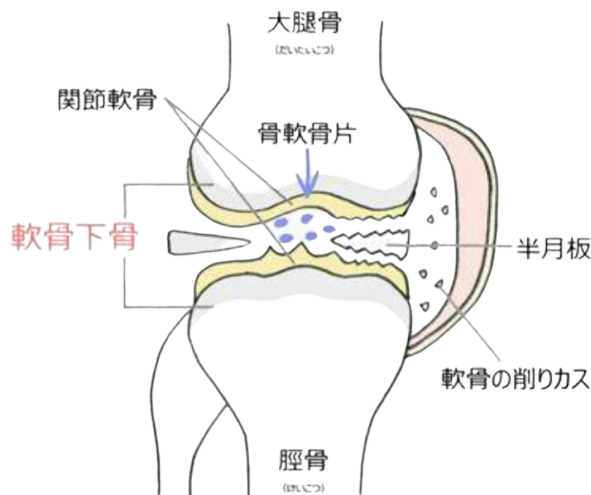


Osteochondritis dissecans

離断性骨軟骨炎（膝）

原因

関節の中に軟骨が剥がれ落ちる障害で、成長期の小中学生（約2：1で男性に多く10歳代が好発年齢）に多く発症します。膝関節では大腿骨の内側が85%、外側が15%の頻度で、まれに膝蓋骨にも起こります。また、外側例では円板状半月を合併することもあります。スポーツなどの繰り返されるストレスや外傷により軟骨の下の骨に負荷がかかる事が原因と考えられています。血流障害により軟骨下の骨が壊死すると、骨軟骨片が分離し、進行すると関節内に遊離します。



症状

初期には、運動後の不快感や鈍痛の他は特異的な症状は出ませんが、関節軟骨の亀裂や変性が生じると疼痛も強くなり、スポーツなどで支障を来します。さらに、骨軟骨片が関節の中に遊離すると膝の曲げ伸ばしの際に引っかかり感やズレ感を生じ、関節に挟まると膝がロックして動かなくなってしまう。（ロッキング）

診断

初期には通常のレントゲンで写り難いので見落とされることがあり、特殊な方向からの撮影が有用です。さらに、CTやMRI検査で病変部の大きさや状態などの確認を行います。

治療

保存療法

- スポーツを禁止し治療に専念することで完治する場合があります。
- 松葉杖を使用し、体重をかけないようにします。
- 3～6ヶ月、場合によっては半年以上の長期にわたりスポーツを禁止する場合があります。
- 3～6ヶ月を経過しても改善しない場合は、手術を考慮します。

手術療法

1, 非分離型（骨軟骨片がまだ剥がれていない状態）

関節鏡視下でのドリリング（障害部位に直径1mm程度の穴をいくつか掘って出血を促す方法）で癒合を促進させます。

2, 遊離型（骨軟骨片が完全に剥がれた状態）

遊離した骨軟骨片を吸収性ピンで再接合します。遊離した骨軟骨片の損傷や変性が著しい場合は、自家骨軟骨移植（じかこつなんこついしょく；モザイクプラスティ）を行うこともあります。

